

六花



俳句雑誌りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

9

山田六甲

避暑地の出来心

しん
親

昼寝覚竜宮城へうしろ髪

辻享子命日八月三日

跳ね返す水へみんみん飽きもせず

大滝の吹き下ろしくる夏の蝶

昼の七種の滝

喉元へ月の滝風下り来る

夜の七種の滝

牡丹のごとくに崩れかき氷

西瓜抱く仁王力士の不二男かな

不二男畑

湯の窓に守宮のをとこをみなかな

大雨の苦瓜に蜂来てをりぬ

鈴虫の国歌斉唱はじまりぬ

たじり

首のべて亀が亀押す大暑かな

義仲寺

藻の花や昼の堅田は子を隠し

やままゆに目鼻をつけてやりました

見回して爆弾西瓜手渡さる
五十昭より

鬼灯の一枝を手向けおきにけり
十二日迎火

あさがほに吹き刺りたる妻楊枝

夜這ひけりあけまの森の夏霧は
大山6句

さる男殺意湧きしと避暑の夜
いびき赤松

雨垂れを聴くのも避暑のひとつかな

薄暗き書齋に避暑を四半刻
英国館マナーハウス

靴沈む書齋に黴のほの香り

なめくぢりなめくぢりては夜の雨

梨むきし盆を洗うてをりにけり
文二郎梨

夏月に一ヶ谷やとよりをみな声
須磨

筆先を水にうすめむ花菖蒲
おほぶりの花よりゆるる花菖蒲
ぶつ切りの蛸の白さの震へをり
青葉木菟ひと声のあと闇深む
曳き帰る田んぼの道の祭馬
夏鴨の点となりたる湖こ国くかな
夏つばめひるがへりては湖展げ
大椀の運ばれきたる瀬田蜆
棹をもて浮巢さしたるをここかな
若かりし母と渡りぬ湖の虹

それぞれに蛍の夜を帰りけり

藤生不二男

山霧の晴れゆく宿やほととぎす

一山を鳴きぬらしけりほととぎす

それぞれに蛍の夜を帰りけり

てのひらに移しそびれし蛍かな

浮御堂儼の匂ひの灯かな

それぞれにほたるのよるをかえりけり ふじおふじお

少人数で蛍狩りにいった。蛍を楽しんでいるときは、蛍を中心に狩人たちは一体感に満ちていたが、蛍の乱舞が終わると、その場に居た者が、それぞれの感激や想いを胸に家路へと向かう。家に持ち帰るのは、蛍を除いてすべて主観の土産なのだ。それが「それぞれ」である。祭りの後の寂しさのようなものも漂う作品。

一見地味に見えるが、蛍狩りの本質を突いていて味わい深い。

今月の不二男の句ではこれが一番佳い。木鶏の句とはこのことを言うのである。

磨崖仏訪ふや毛虫を浴びながら
升田ヤス子

木曾馬の北を見てゐる緑雨かな

緑風や羊の膝毛刈り残り

空つぽの天蚕やままゆ吹かれ天上寺

散り敷けるハンカチの花梅雨滂沱

磨崖仏訪ふや毛虫を浴びながら

まがいぶつとうやけむしをあびながら　ますだやすこ

磨崖仏を見に行く途中毛虫に悩まされながらも引き返さなかった。身の毛もよだつ毛虫をも厭わずである。磨崖仏とは崖に彫つてある仏。鬱蒼として不気味な所が多い。近づくのさえ不気味さが漂うのに、何の因果か毛虫の洗礼までうけなければならぬ。ぶら下がったり落ちて来たり、鳥肌が立つような道を進まなければたどり着けないのだ。しかし毛虫をも厭わず歩を進めるのは磨崖仏に一目でもまみえたい一心。そういう恐怖を語る主観「怖いながらも」などと言いたい（鑑賞の）ところを抑えて「浴びながら」とだけにしたのがヤス子の努力である。

雪卿集

馬

永田万年青

木曾駒のたてがみ黒し風薫る
新樹光厩舎の湿り臭ひけり
新緑の牧に放たる木曾の馬
新緑や触れらるる馬尿をして
薫風や厩舎の闇に馬二頭

黴

松本文一郎

黴の宿赤青黒黄桃もあり
棄教者や聖書の黴にたじろぎぬ
稚^や去りて仕舞忘れの天瓜粉
老鶯の先回りして鳴きにけり
父の日や誕生日とふ父のゐて

祐三父母会

雪卿集

牡丹

梶浦玲良子

離さざる夏蝶低しあまねく日
牡丹の首に斜めの日暮くる
助演女優はマロニエの花日の斑
蝉さんさん外国人がひとり居る
浪音に病葉さほど遠からず

夏祭り

市川伊團次

自転車のふらついて青虫よける
さくらんぼ大粒空へくつきりと
夕暮れに菖蒲の花を池の上
夏祭太鼓一打ちより始む
向き合うて浜昼顔と目で遊ぶ

雪樹集

田尻
勝子

春駒や猫嶽は父千里母
曲屋に馬の消えけり終戦日
雨音は楠若葉より響き初む
色形とりどりにあり梅雨の森
夏の蝶展翅した時神現れる

溝
渕

弘
志

ひと駅を歩いて帰る月涼し
夕立や匂ひ懐かし野球場
蝉時雨道を迷ひてしまひけり
茶店にて滝眺めつつ人恋し
滝音に息弾ませて歩きけり

蛍雪譚

六甲選

俳句には生長痛がある。

二十六年九月号鑑賞

祭馬田んぼの道を曳き帰る

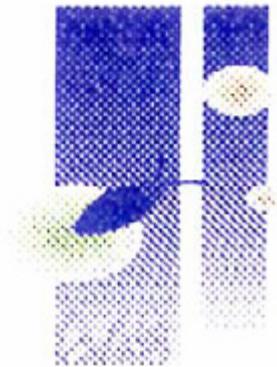
笹村 政子

祭りにかり出された馬を曳いて田んぼ道を帰っていく馬主と馬。馬主はいくぶん昂揚した大きな声で馬を労いながらてくてくと馬を曳く。馬が歩きながら首を上下に振る。馬主の言葉にいちいち頷いているように見える。なあマサヨシよ、今日はおめえ立派だっただなや、おら、みんなに鼻が高かったぞい。などと声を掛けながら帰る光景が、ほのぼのとじっくりと味わえる。但し、「祭馬」という季題は私の持っている歳時記に見あたらないが、すでに季題として取り扱っている歳時記があるかも知れぬ。馬のかかわる祭りは季節がさまざまなのでこの作品は夏祭に出演した馬としておく。が、『去来抄』『故実』の中で「先師、『季節の一つも探り出(いだ)したらんは、後世によき賜(たまもの)』となり」というのをすでに六花「去来抄」でも採り上げているとおり。「祭馬」が季題になってもいい。

おぼぶりの花よりゆるる花菖蒲

大きな菖蒲の花はどつしりとして見えるように見える

が、そういうものほど風を捉えやすく、少しの風にも揺れると指摘。いわば力士の蚤の心臓のようなもので、見かけ倒しということなのだろう。でも俳句の鑑賞ではそのような皮肉な見方をしない。ゆったりと揺れながら菖蒲の花色を空間に広げる優雅な美しさを味わうべきである。だが政子くらいの実力を持つていれば、大ぶりの花だから背が高く揺れやすいという理屈を取り払ったところに俳句の真髄を求めてはいかがだろう。これが今後の精進にかかっているところで「より」を省けば大らかなのびのびとした俳句になるはず。(以下略)



六花集

田新か花黒
 水樹たう揚
 入光ばつ羽
 り脈みぎ牧
 亜打や緬の
 麻つ馬まが羊
 鷺栗の啼橋
 急毛中け揺
 に撫はるる
 駆で草牧
 けを無のる
 にれくのる
 りばて昼中
 廣畑
 育子

老迷囀緑囀
 ひの陰や
 こ聞に牧
 やそ
 眼人こ眼の
 のゆ愛栗
 下のゆるら毛
 世るら毛
 遙樂
 かし牧しの
 にか場木草
 た馬曾を
 大つ
 阪む静の食
 湾りか馬む

赤松有馬守破天龍正義

手毛桐山青
 に筆の霧葉
 受の花やし
 く親高ケて
 父くる反
 の咲ンり
 延小かを身
 命言せ囲美
 の梅しむし
 水雨旧石百
 夏じ家
 兆めか地済平
 すりな蔵仏居
 滯子